

「長野県公立高等学校入学者選抜制度(案)」に対するパブリックコメントの概要

高校教育課

- 1 募集期間 平成31年(2019年)4月15日(月)～令和元年(2019年)5月17日(金) 33日間
- 2 募集結果 意見提出者 140(個人・団体) 項目別意見数 395件
- 3 意見の概要 前期選抜、後期選抜、再募集を含めて、選抜制度全体に関わるご意見や実施までのスケジュール、検討方法等幅広いご意見が寄せられている。項目別意見の概要は以下のとおりです。

4 内 訳

項目	件数
【1】 選抜制度全体	63
【2】 制度のねらい・中学生へのメッセージ	57
【3】 前期選抜(全体・募集人数・志願)	14
【4】 前期選抜(選抜資料・評価方法・選抜の方法)	38
【5】 後期選抜(志願)	11
【6】 後期選抜(選抜資料・評価方法・選抜の方法)	34
【7】 前期選抜・後期選抜のその他の検査	14
【8】 選抜の実施時期・実施期間	17
【9】 再募集・追加募集	8
【10】 英語の4技能評価	6
【11】 不登校等の生徒の対応	12
【12】 実施までのスケジュール	25
【13】 意見の取り扱い	22
【14】 検討の方法・進め方	16
【15】 その他	58
合 計	395

- 5 今後の取り扱い 現在進めている中学校、高等学校からのご意見ご要望を含め慎重に検討し、県教育委員会としての考え方をまとめていく。

6 主な意見の概要

【1】選抜制度全体

意見の概要	
(1)	受検生の「資質・能力を評価」することよりも、希望するすべての生徒に後期中等教育の場を保障することが重要。
(2)	中学校までと違った気持で高校生活を送りたいと願う子どもたちは多い。そういう子どもたちをすべて受け入れてほしい。
(3)	今後、高校が如何に魅力あるカリキュラムの提案・実践を行えるかが、この入試改革の成否に関わっていく。
(4)	この制度は、変更のねらいにある「学力」「思考力」等の向上に逆行する。なぜなら受験競争が激化し子どもは自己肯定感を減らすから。職員を増やすこと、すべての小中高校で少人数学級にする等をすすめることが必要。
(5)	現行制度に比べて極めて複雑な内容で、全体を通して今まで以上に受検生や高校現場にストレス・負荷を与えるのではないかと考える。
(6)	中学校での教育活動によって、受検に有利不利が出てくるのではないか。また、入試によって、中学校の教育実践を縛ることにならないか。
(7)	多様化する価値観や変化の激しい社会情勢の中で生きていくこれからの子どもたちにとって、重要な資質能力を育む制度に進化させてほしい。
(8)	前期、後期の大きな枠組みの変更がないことを評価したい。前期、後期の受検またはA基準、B基準の評価は機会が複数化しており評価できる。高校も特色化を図れ、生徒の多様化に対応できる制度である。
(9)	中学で学ぶべき学力が十分に獲得できていることが大切であり、入学者選抜試験の対象内容を広げることは、基礎学力の低下を助長する。
(10)	高校が募集時点で基準を決めて、適合する生徒だけ受検できるシステムは、適格者主義をさらに推し進め、高校による選別と受験競争を激化させることが危惧される。
(11)	「記述式問題」は、中学段階から、知識や技能を活用し、自分の考えを他人に分かりやすい文章でまとめる力、相手を説得できる文章や考えを育む力、根拠に基づき論理的に物事を考え論述する力等を育み、その到達度を確認することができる。
(12)	新たな入試は教職員の負担が増えるという考えがあるが、子供たちの育みや子供たちの将来を考える時、新たな入試制度を導入するべきである。
(13)	今回の制度(案)の通り行えば、公立高校83校で83通りの選抜制度が可能になる。高校間格差がさらに広がり、今まで以上の「多様化」路線となるのではないか。
(14)	教室での授業のほかに、自ら能動的に取り組む活動が有効だ。子どもたちが将来を幸せに生き抜くために、これらの力をしっかりと育ててやりたい。
(15)	今は、新しい学力観がまだ定着しておらず、これから新しい学びが深まっていくことと思う。新しい学びが定着し、当たり前になってきた頃、学力検査等の評価の比率を高くする高校が出てきても良い。
(16)	公教育が本来目指すものは、基礎学力の保障であったはず。学校外の学びまで高校入試で評価されること自体に問題がある。
(17)	公立学校であればどんな生徒でも受け入れ、育てる姿勢をもってほしい。現実に行きたい高校へ行ける子の方が少ない。
(18)	新たな学習指導要領において幅広い学力を身につけさせることが必要であるなら、学力検査においてもそれを評価できるようにしなければ、学習指導要領を無視することになる。
(19)	他者によって割り振られた学校ではなく、自分で選んだ学校に行けるようにすることこそ、高校を途中でリタイアしてしまう生徒を減らす、あるいは中学校で居場所を見つけれなかった生徒がやる気を取り戻すための方法である。
(20)	学習の内容が劇的に変化するのだとしたら、今までの入試制度では学校での学習の仕方が変化するとは思えない。制度の周知や準備に負担が大きいと思うが、変更しなければならぬと感じる。
(21)	普通に学力をつけ、ゆっくり思考させて人格を完成させる。これが教育の目的である。高校に無理に「特色」を作らせないでほしい。

【2】制度のねらい・中学生へのメッセージ

意見の概要	
(1)	各校の「3つの方針」と学力検査を密接に繋げることが重要である。各校の考えが、選抜の基準に反映され、受検生に伝わるものであってほしい。
(2)	「3つの方針」の「生徒募集方針」は入学者選抜の方針ではないと、県教委の要項にある通り確認すべきであり、受検生や関係者に周知すべきである。「高校入試の観点」は各校の負担が増すので簡略化したものにすべきである。
(3)	高校入試では中学校での教育課程に位置づけられた授業を通しての学力を評価すべきであり、教育課程外の学びや学校外での活動まで評価すること自体に問題がある。
(4)	校外の活動に取り組める状況がすべての子どもたちに保障されているわけではない。学校での授業で学んだ内容を評価することが、公平性を担保する上でも必須条件ではないか。
(5)	長野県の地域性を考えると複数の受検の機会があるのは都市部のみである。前期・後期の複数の受検の機会を維持したことは受検生にとってありがたい。
(6)	1校1校の特色を打ち出すことは必要なのか。どの普通科でも同様に学べるという保障のほうが大切だと思う。そのための条件整備に予算を配分し、労力を注いでいただきたい。
(7)	この案で示されている通り、生徒の多様な資質や能力を入試で見えていただけることは重要。学力検査のみでは、一面でしか生徒を見ていないことになると思う。
(8)	中学校でも、調べたり、発表したりする活動が増える。これからの生きる道を切り開いていくためには、こうした力こそ重要。さらにそうした活動が高校入試でも評価してもらえることは、ますます意欲が出てくると思う。
(9)	高校の特色や生徒の得意な分野をより深めていくためにも、配点基準の比率の変更、加点の違いも良いと思う。
(10)	高校も特色化を図れ、生徒の多様化に対応できる制度であると思う。自分らしく学ぶ高校を選択するため各高校の特色を明確にしてほしい。
(11)	入学者選抜制度のねらいが明確になったことで、これから先、受検を迎える子どもたちにとっては、自分が行きたい学校の特色がはっきりわかったうえで、志望校を決定することができるようになる。
(12)	「将来の夢」をはっきりさせ、「得意分野」をもつことなどを求めているが、発達段階では難しい。一つの方向に特化したものをもたせることが、中学生段階で必要か。
(13)	中学校での学習だけでは高校入試のために不十分なのか。中学生に対して不安をあおるものである。高校入試の段階では、まだじっくり考えたいという生徒も多いのではないか。
(14)	中学生には、伸ばしたい力をしっかり意識しながら伸び伸びと学び、志望校に自分の学びの結果をぶつけ、夢を持ってチャレンジして欲しいと思う。複数の機会があることで、思い切ったチャレンジが可能になる。
(15)	今回の制度は、高校入試までに将来の夢をはっきりさせ、得意分野を持つことを迫っている。入試のための準備に追われ、中学校の生活が益々奪われることを危惧する。
(16)	各学校でどんな目標で、どんな生徒を育てたいか示すことは中学生に負担が大きいという意見があるようだが、もし、中学生にそのような判断ができないというのなら、中学生や保護者を馬鹿にし過ぎ。そのような判断ができるように、中学校で育ててほしいと思う。
(17)	中学生時代は様々なやり直しを保障することこそ大事だと考える。こんなに早く自分の可能性を固定化し高校の特色で選抜することに疑問を感じる。
(18)	新たな提案は「学力の3要素」を評価するとしているが、1回の入試に何もかも詰め込むことで評価できるものとはどうも考えられない。
(19)	これからの時代に必要とされる力を、すべての生徒に身につけさせることが高校の使命だと思う。そのため、高校が変わっていく必要があると思う。
(20)	高校では、探究的な学びを一生懸命に実施している。大学入試においてもこうした毎日の取り組みが評価される。評価する先生方は大変かもしれないが、子どもにとっては良い制度だと思う。
(21)	全ての場面で頑張れと言われてるように感じる。「自分らしく学ぶことができる」かどうかは実際に高校に入ってから分かることではないか。また、その影響は小学校の教育にも及ぶと考える。
(22)	どのような学びを中学時代にすべきなのかが明確に示されたのは良いと思う。

【3】前期選抜(全体・募集人数・志願)

意見の概要	
(1)	各学校の実情、募集の観点に沿った生徒を募集する(B基準)のは許容するとしても、それならば前期選抜はなくしてもらえないか。高校現場の負担増等で在籍高校生の指導が手薄になってしまうことが懸念される。
(2)	学力検査で評価できない部分を見るためという前期選抜導入時の趣旨を踏まえ、学力検査の実施の有無、検査内容は学校の判断に任せるべきである。得点比率も変えるべきではない。
(3)	前期において、これまで人前で話すことのみを得意としていた受検生が有利とも評されていたが、学力検査の導入により、より適切なものになっていくのではないかと推測できる。
(4)	「定員の60%以内」と枠を広げることは生徒の積極的な学びをより応援する結果につながるため、良いことと考える。
(5)	前期で入学比率を上げたことで「早く合格したい」受検生の心理として志願者が増え、より多くの不合格者を生み出す可能性は免れない。
(6)	志願理由書に関しては、なくす方向か簡略化する方向でお願いしたい。

【4】前期選抜(選抜資料・評価方法・選抜の方法)

意見の概要	
(1)	多様な物差しで生徒を見たいという本来の趣旨に沿った前期選抜は、一定の成果を収め定着してきていると考える。特色学科などで「合教科的」な学力検査問題を独自に実施している中、前期に学力検査をあえて加えることの意義がわからない。
(2)	前期選抜が導入されたのは、学力検査で評価できない部分を見るためではなかったのか。問題は、基礎的な内容としているが、二つの教科を合体するような教科横断的な問題とするように検討されていて、受検生は対応を迫られる。
(3)	今回導入が提案されている学力検査は、後期選抜とは異なり、短時間で実施されるものであり、受検生への負担という点では一定の配慮がなされたものだと思う。
(4)	一定の学力検査を課すことで、面接だけで済むという感覚を防止することにつながると思う。基礎学力を問う問題を課すのは、中学期の学習を大切にするという意味にもつながると思う。
(5)	前期選抜は、生徒会役員の経験があるとか、よく話ができるとか、そういう人が合格しやすい傾向があったように思う。学力試験を設けることで、このような疑念は解消できると思う。
(6)	前期学力検査は、さらなる負担増加となる。やむを得ず実施するならば、高校での学びにそなえて基礎的基本的な学力をみることに限定した問題とすべき。
(7)	その他の検査は、面接、プレゼンなど学校によって異なり、加えて、学力検査ⅠⅡの比率が学校ごとに設定されるなど中学生に混乱を与える。生徒に寄り添った丁寧な指導ができなくなる。
(8)	前期選抜の学力検査ⅠⅡで学力を図るデータが得られるか疑問。さらに学力検査のⅠⅡの比率を各校で変えられることは制度を複雑化している。
(9)	前期選抜の学力検査の比率に関しては、それぞれの学校の3つの方針に従い、特色が示せるとよい。
(10)	中学校段階から特定の教科に傾斜した学習を推奨することは受け入れられない。中等教育を保障するという観点からも学習に偏りが生じることが危惧される。

【5】後期選抜(志願)

意見の概要	
(1)	学校独自検査の実施は、そのための準備が必要であり、途中の志願変更が困難となる。
(2)	後期選抜において、一部ではあっても特徴のある生徒、個性のある生徒への評価がなされることはよいことだと思う。
(3)	理数分野の探究を推進している高校へは、文系の生徒は入りにくくなり、公平性が奪われるのではないかと。

【6】後期選抜(選抜資料・評価方法・選抜の方法)

意見の概要	
(1)	入試制度を複雑化するのではなく、後期は学力検査をしっかりと中心にすえた入試制度にしたいと思う。
(2)	後期の学力検査はこれまでのようにバランス良い出題を希望する。その他の検査に関しては、受検者、採点者双方にあまり負担にならない方法を研究し、安心感をあたえてほしい。
(3)	検査問題もこれまでの延長上のもので出されると推測されるが、それは本当の意味での多様な生徒の資質や能力を測れるまでのものになるのか疑問。
(4)	前期選抜だけではなく、後期選抜においても知識技能だけではないものを評価する制度に変えていく必要がある。
(5)	「B基準」の導入は、各高校が示す「特色」によっては門戸を狭め競争を激化するだけになる。特定の能力のみに偏った人間形成を助長しないか心配。
(6)	A基準とB基準で想定される合格者の逆転現象にも説明責任が生じ、両基準により負担増が懸念される。
(7)	B基準の最大30%は、A基準の選抜が主体であるために必要な制度である。基本的にはA基準で選抜され、受検生はさらに力を入れたい科目としてB基準の部分を努力するようになる。
(8)	後期選抜A基準・B基準の評価基準の公開は受検生にとって必要不可欠なものである。特にA基準・B基準の比率割合、調査書や学力検査の傾斜配点科目、その他の検査項目の比率割合など透明性が保障されるべきである。
(9)	後期選抜におけるA基準とB基準というものは、各校の特色が現れやすいため学校側としては力を入れる部分を示しやすく、入学者にとっても学校を選ぶ際の新たな基準になる。
(10)	調査書の評価に用いる教科に軽重をつけることで、中学校の授業の取り組みに軽重が出てくるのではないか。

【7】前期選抜・後期選抜のその他の検査

意見の概要	
(1)	「主体的に学習に取り組む態度」など、基準をどう決めるのか。家庭学習などの「提出率」が偏重されることも考えられ、生徒の学び方への影響も心配される。
(2)	「様々な学びの活動」の「場面」や「成果」とは、どのようなものをイメージすればよいか。部活動や職場体験学習は中学校での学びだと思われるので、何が加えられるのかが疑問である。
(3)	調査書に観点別評価を加えることに関して、「主体的に学習に取り組む態度」などの基準が全県で統一できるのか。生徒と先生方の信頼関係に影響が出ることが心配。
(4)	その他の検査では、「面接」、「プレゼン」等があげられているが、得意とする生徒と苦手にする生徒で不公平感がある。
(5)	前期後期どちらもプレゼン等の自己表現の力が求められるが、引き出されていない能力もある。その力を引き出し育成する事こそ、中学、高校で求められる教育である。
(6)	子どもたちにも中学校教員にも負担を増加させる「その他の検査」の導入ではなく、調査書の特定の項目のみをその他の検査として用いるとはどうか。

【8】選抜の実施時期・実施期間

意見の概要	
(1)	前期発表後から後期選抜までの期間は、報告書によって中学校における指導の困難さが指摘されていた。今回の制度改革によりこの期間が短縮されることは、中学校における課題を解消する方向である。
(2)	前期選抜と後期選抜の間の期間がこれまでより1週間短縮されることは、選抜内容が複雑化することに加え、短縮された期間に受検生だけでなく進路指導する中学校側も選抜する高校側も多忙になる。
(3)	前期選抜不合格の生徒が後期受検校を決めるのには、現行でも時間が足りないと聞いている。中学校側での指導は可能なのか。
(4)	検査等の具体的な提案と日程案がセットで示されなければ、実際の中学校での進路指導のすすめ方がイメージできない。現場で実際にできるのかどうか、判断ができない状況である。

【9】再募集・追加募集

意見の概要	
(1)	A基準、B基準を実施した高校の再募集の選抜は、両方の基準に適応させた選抜を希望する。
(2)	定時制課程において追加募集が廃止されることについては、受検機会の保障がされないので慎重に意見聴取をすべきである。
(3)	追加募集をなくすという提案だが、丁寧な制度設計が必要ではないか。追加募集に関して「定時制については後期選抜を受検しなかった生徒も志願できる」などの配慮をすべきである。

【10】英語の4技能評価

意見の概要	
(1)	英語スピーキングテストは、評価基準の公正性・公平性を保つことが困難であるとともに、中学への影響も大きいことから、導入すべきではないと考える。
(2)	スピーキングを導入し、「英語の4技能評価」を行うことについて全面的に賛成。これからのグローバル化がさらに進む時代では、他国の人と国内外で、英語を「話す」ことが必須になってくる。
(3)	英語のスピーキングテストの導入のため、各校にテストのための設備設置ができるのか疑問。

【11】不登校等の生徒の対応

意見の概要	
(1)	学力が十分に備わっていない生徒への配慮も必要かと思われる。5教科の成績(配点)以外の自己PR等を重視する枠を設けるなど、全ての子ども達に多様な選択ができるよう検討してほしい。
(2)	不登校生徒も「将来の夢」や「挑戦したいこと」があり、それをかなえるために、選択した高校で自身の持つ力を十分に発揮できる受検環境を整備することも必要。
(3)	不登校の生徒にとっても、当然「基礎的な知識・技能」と、今後必要とされる「思考力・判断力・表現力等」は必要である。小中学校時に不登校であっても学びたいという生徒のために、学校外で学べる支援体制(制度)を整え、「基礎的な知識・技能」と、今後必要とされる「思考力・判断力・表現力等」を育めるようにするべきである。
(4)	かつて前期選抜は、不登校の子ども達に開かれた入試制度であったが、いつの間にか前期は全てができる子ども達の選抜に替わってしまった。前期選抜が始まったころの考え方に戻し、不登校の子どもにとってハードルを下げてもらいたい。

【12】実施までのスケジュール

意見の概要	
(1)	子どもたちが将来について、自ら判断し、自ら納得して、自ら決められるような仕組みにするために教育現場との十分な協議と検討をした上で入試制度を決定してほしい。
(2)	拙速な導入ありきではなく、県民やとりわけ主人公である子どもの意見を十分に聞いてほしい。
(3)	多様な生徒を評価する方法や内容が示されていないことも大きな不安である。「現中1から実施」というスケジュールには疑問を感じる。
(4)	実際に導入できるかどうか判断ができない状況での決定は避け、十分な検討ができる条件での意見募集を行ってほしい。
(5)	入試に関わる具体的情報を知る時期が中学3年生になってからでは遅いと感じる。明確な情報をより早く、該当する年度の生徒や保護者に伝える必要がある。
(6)	「3つの方針」と「実施方法」が出されて、その内容を中学校側が十分理解・検討する前に、新たな制度での入試実施では、各校の目指す方向や教育内容を生徒が把握できないままに出願せざるを得なくなる。
(7)	学習指導要領に合わせて学びが変わることを考えると、入試制度を変える時期は2022年度選抜が妥当である。入試が変わることによって、小学校、中学校の学びの変革も期待できる。

【13】意見の取り扱い

意見の概要	
(1)	制度を変える前に、WEBで意見を求めるだけでなく、相対で説明をする機会をつくる必要があると思う。
(2)	中学校の先生方から意見を聞くこと。そして保護者への周知も徹底してほしい。
(3)	制度(案)について高校の教員には見解を求めずに発表されたもの。中学の教員も同じではないか。今後は現場の声を聞くべきだと思う。
(4)	各所からの意見やパブコメの意見をもとにして、さらに公開の場で十分な検討が行われるべきであると考えます。
(5)	パブリックコメント実施と入学者選抜制度公表が早すぎる。パブリックコメントについて話し合う時間が必要ではないか。
(6)	パブリックコメントを受けて、何を変え、何を変えないのか、どのように県民に説明するのかを示す必要がある。

【14】検討の方法、進め方

意見の概要	
(1)	現在の高校入試の在り方及び問題点をよく出し合った上での変更を切に希望する。
(2)	中学生のほとんどが高校へ進学を希望する現状から、一定程度の学力や意欲をはかる学力検査を行ってきており、不合格者が多くない現状を考えると、特に変更し複雑化する必要はないと考える。
(3)	現行制度の何が問題でどこをどう改正しなければならないのか、どこにも明記されていない。どうして現行制度を変えるという結論ができたのか疑問である。
(4)	毎年の募集の観点等の変更は、「自分らしく学べる」と思いを描いてその高校を目指して中学3年間を学んできた生徒にとって、直前でハシゴが外されてしまう可能性もあるということを理解してほしい。

【15】その他

意見の概要	
(1)	中学校、高校それぞれの教員の入試業務に関わる負担増は極力避けたいところだが、変えるために負担が必要なこともある。子どもたちに軸足を置いた入試制度改革となるよう期待している。
(2)	高校別の多様な検査への対応、志願変更の難しさ、塾へ駆け込む親子の増加、入試業務増加による高校3年生への進路指導への影響、試験作成者の負担、中学校現場・高校現場・生徒・保護者の負担が心配である。
(3)	それぞれの検査に対応するため、生徒は今以上に多岐にわたる準備が強いられる。中学校現場での業務が増加する。
(4)	かつてない教育内容、方法の改変を求める新指導要領への対応、高校においては大学入試の共通テストへ対応、さらには再編に向けて諸業務等、学校現場はかなり多忙になる。
(5)	先生方の負担を減らす部分について、今後考えていただきたい。もし、この部分で負担が減らせないのであれば、他の部分で減らすことができるよう、工夫をしていただきたい。
(6)	中学校教師が生徒や保護者に正確な情報提供ができるかが不安である。よりわかりやすい説明資料を用意した公表、および中学校へ配布をお願いしたい。
(7)	受験産業への依存がさらに強まることも懸念される。今でも多額の教育費負担をしている保護者に対して、更なる経済的負担を迫るものとなりかねない。
(8)	「学び」に対する意欲が低下する原因は、過度な「競争」によるものが少なくないと認識し、豊かな学びを保障する教育条件整備、制度設計を研究していただきたい。
(9)	出身地域により、直近の通学可能エリアの高校へ全員入学とすべきである。
(10)	「目指す高校」が自分の住んでいる地域になく、自宅を離れなければならない子どもたちが出るのではないかと危惧している。その時に家庭の経済状況が大きな影響を与えることになる。

(11)	すべての高校に「3つの方針」を策定させ、前・後期ともに「募集の観点」を設定させることは、各高校へ特色化競争のレールに乗ることを求めるもの。この特色化競争の向こうに高校の統廃合が待ち構えていることを危惧する。
(12)	高校改革、募集定員、入学者選抜制度の三位一体について今回はひとつの好機と捉え、広く検討されることを希望する。
(13)	少子化の本質的原因としての格差と貧困問題、子育て環境や教育費の改善、教育に対する公的支援について改善をすべきと考える。
(14)	制度改革により、中学校の学習内容に変化が生まれることを期待する。また、その他の検査により、「主体的に学習に取り組む態度」(学力の三要素)を評価できる。
(15)	制度(案)には①前期選抜における合教科問題 ②英語のスピーキングテストの導入 ③追加募集の廃止 の記載がなくコメントで触れたのみ。これらは成案に入れることはできないものと考え
(16)	自らの能力の位置づけはどうかを本人も知っている必要がある。個人の成績の位置づけを本人に伝え、その本人の弱点の克服法等を提示し教育する必要がある。
(17)	これからの時代を担う子ども達の自主性や多様性を育てていく上で、様々な経験や知識が必要だ
(18)	高校進学という進路決定の後ろには、義務教育9カ年の学習の成果もあることを忘れてはならない。「この高校に行きたい」と考えた先には、入学試験を突破しないと入れないため、そのための対策も必要になる。
(19)	学力検査の得点で輪切りされた視点で学校を選ぶのではなく、様々な特徴を打ち出した高校の中から、自分が本当に学んでみたい学校を選んで本物を学ぶこと、そのような時代が来ることを期待する。
(20)	高校選択時の進路希望はその後不変である保障はなく、揺れ動く不安定さこそが重要な要素。学校は受け入れた生徒の全方位への発達を保障すべきである。